

Title	ゴンクール兄弟『ルネ・モープラン』(第十一～十四章)(翻訳)
Sub Title	Edmond et Jules de Goncourt Renée Mauperin (chapitres XI–XIV) (traduction)
Author	山本, 武男(Yamamoto, Takeo)
Publisher	慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会
Publication year	2014
Jtitle	慶應義塾大学日吉紀要. フランス語フランス文学 (Revue de Hiyoshi. Langue et littérature françaises). No.59 (2014. 10) ,p.123(28)- 150(1)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10030184-20141031-0150">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10030184-20141031-0150</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

## ゴンクール兄弟『ルネ・モープラン』(第十一～十四章)(翻訳)

山本武男

これまでのあらずし

親の心子知らず。第二帝政初期のパリ近郊のブルジョワ家庭に忍び寄る悲劇の予感。モープラン家の長男アンリは新進気鋭の経済評論家としてパリに独居し、知識人らを集めてサロンを開き、有力な人々の間に顔を出しては人脈作りに余念がない。仕事にかまけて冷淡な夫の代わりに注がれた母の愛と情熱の対象だったアンリは、気が付けば、金銭の為ならば偽りの恋も厭わぬ計算尽くの出世主義者に変貌していた。結婚適齢期を迎えている末娘のルネは、兄アンリが世の中で物欲を追い求めているのと対照的に人生の現実を知ろうとせず、溺愛する父を恋人のように慕い、見合いとなれば、相手はことごとく軽蔑し、破談にし続けている。父親が自分は高齢で、自分が死んだ後のことも考えるようにと結婚を促すと、ルネは泣きじゃくり、教会へ行つて、父親より自分が先に天に召されるよう祈るのだった。物語は一見平穏な日常を取り戻し、モープラン家と富豪ブルジョア家との交流が描かれてゆく。

〔翻訳〕

## 十一

日中にしばしばルネは、温室を取り壊した際に建てた小さなアトリエに絵を描きに行ったが、庭の奥のそれは鄙びた感じで、緑に覆われ、壁には蔦が這い、廃墟とも鳥の巣とも付かぬ様相を呈していた。

この小さなアトリエの中、アルジェリアのクロスで覆われたテーブルの上に、その日は青で図柄が描き出された日本の角型花瓶、檸檬、赤い表紙の古いフランスの武器名鑑、更にまた組み合わせると、とてもしつとりと絵になる鮮やかな色をした二三の置物が、硝子張りの屋根から落ちる日光の下に配されていた。テーブルの前では、ルネがそれらの対象を、既に下地の出来ている画布の上に、針の様に毛先の細い絵筆で描き込んでいた。彼女の白いピケ織りのドレスのスカートの裾は大きく波打ちながら彼女が坐っている腰掛の両端に垂れ下がっていた。彼女は庭を歩きながら摘み取った一輪の白薔薇を、耳の上の辺りの豊かな髪に刺していた。腰掛の横木に片足を掛けていて、スカートの下から食み出しているその靴は甲の部分に被いがなく、そこに白い長靴下の一部が見えていた。

ドノワゼルは、傍で彼女が仕事をしているのを眺めながら、部屋の片隅から拾い上げてきた一冊の画集の上で、上手とは言えなかったが、彼女の横顔のデッサンに挑戦していた。

「いやはや！ そのポーズ、とても綺麗だよ」と彼は鉛筆を削り直しながら言った。

「走り出した乗合馬車に追いつく時みたいな調子で、君の似姿を捉えることが出来たらと思うよ……君は止

まってくれないから……そんな風に、何時も揺れ動いていられるとね……」

「あら、そうかしら、でも、ドノワゼル、変な似顔絵にはしないでね……一寸でいいからあたしを喜ばせて」

「太陽のように君は輝やいている……ダゲレオタイプほどの正確さで仕上げてみせよう……」

「見せて貰ってもいいかしら」そう言うのと彼女は上半身をドノワゼルの方に反らし、胸の前で腕支えとパレットを交差させた。

「あら！ あたしって美人じゃなかったのね……」そう言うてからまた絵筆を取り「本当に、あたしって……あたしってそんななの？」

「一寸は似てるよ……それなら、ルネ、次の質問に率直に答えて貰いたいのだが、君は、自分自身に就いて、どうお考えか？……美しいと思ってるか？」

「いいえ」

「では可愛いとお思いか？」

「まったく……ぜんぜん……」

「おやおや、この件に関しては思慮深いんだねえ……」

「そうね、二度も否定してしまったわ」

「なるほど分りました。君は自分を、美しくも、可愛らしくもないと考えているとすると、要するに自分のことを……」

「醜いと思ってるか？ そんなことはない。本当にそうは思わないわ。説明するのは大変難しいけれど……日によっては、自分を鏡の中に見ていると、自分が……何て言ったら良いかしら？ 要するに自分自身に満足出来ると言うか……あたしの顔自体に満足を覚える訳ではないけれど、そんな日にあたしが持っている雰囲気

と云うか、あたしの中にあつて、表情にまで現れる何かに……はつきりとは分らないけれど、幸福と言うか、喜びと言うか、生命力と言うか、感動と言うか……どれでも構わないのだけれど！ あたしにもこんな瞬間があるの、美しく自分の世界を欺いてみせるかの様な……どうあれ、あたしが、美しくなりたいっていう願望を抱いていたことに変わりないわ……」

「ほら、ほら、そうだろ……」

「本人は愉しいのよ、あれこれ考えるのつて……ほら、例えば、あたし、背の高い女性になりたかったの……綺麗な黒髪……薄めの金髪なんて遣り切れないわ……白い肌と見分けが付きにくいのも……ああ、スタヴロ夫人の様な肌を持つことが出来たら、と思つたものよ……一寸日焼けした様な……そういうのが、私は好きなの、趣味というか……それなら鏡の中の自分を見詰めるのが楽しかったに違いないわ……夜、寢床で寝ている間に、曲線の美しい体に成長して欲しかったけれども……朝、裸足の足で静かに絨毯の上を歩み去るときなど片足を上げて、何処かで見たことのある彫像のような足になりたいなんて思つたものよ……馬鹿みたいでしょ！」

「そういう姿が、他の人たちにとつて美しいかどうかは、君はこだわらないわけだろ？」

「美しいという人、美しくないという人、様々でしょう……皆を満足させることは出来ないわ……あたしが好きな人たちだけでいいの、美しいと言つてくれるのは、無関心だったり、好いて貰えなかつたりすれば、相手を醜い者と看做しがちだと思ふけれど、そう思わない？ 眼中にあるのは自分と相応の者だけなんだわ」

ドノワゼルは鉛筆を手にデッサンを再開していた。「可笑しいなあ、君の理想は、黒髪になりたいだなんて！」と僅かな沈黙を破つて言つた。

「じゃあ、貴方はどんな夢を見るの？」

「僕が女だつたらかい？ 褐色の髪でも、金髪でもない小柄な娘になつてみたいかな……」

「と言うことは、栗色の髪になりたいのかしら？」

「それに太目の女、ああ、鶉の様に太っちゃの……」

「太っちゃが良いの？ ああ！ ほっとしたわ……ひところ、あたし、あなたから、愛の告白をされるんじゃないかと思って、びくびくしていたの……あなたが四十歳になったら、考えてあげてもいいけれど、白髪混じりでなきやいやよ」

「勝手に年を取らせなくてくれよ、ルネ、僕の年は、ほら、この通りまだ……それなら、僕個人にとっては、君の年齢がいくつと感じているか、分るかな？」

「分らないけど」

「十二歳だよ……そして、これからも君はずっとその儘なのだ」

「ありがとね、あなた、それがあたしの望んでいることだわ」とルネは言った。「それなら、頭に思い浮かぶどんな馬鹿げたことだって貴方にお話し出来るもの……ねえ、ドノワゼル！」少し黙った後、彼女が改めて呼びかけ、「貴方は、恋をしたこと、ないの？」と訊いた。それから彼女は少し画布から距離を取り、肩の方に一寸頭を傾け、彼女が示した語気に対する反応を観察しようとした。

「おっと！ 始まったね！」とドノワゼルは応酬した。「こりゃ、大問題だぞ……」

「どこが問題なのよ？ あたしの質問の。他の質問とおんなじじゃない。どうってことないと思うわ……てことは、こう云う話は社交界では問題にならないってことかしら？ ところでドノワゼル、貴方はあたしを十二歳だって言うけれど、それはとても嬉しいし、あたしとしては問題ないんだけど、あたしは二十歳でもあるの。あたしはいわゆる若い人よ、本当に、だけれども、あたしの年齢で、一度も小説を読んだことも、一度も恋歌を歌ったこともない若い人たちがいるなんて筈がないでしょ……そう云うものに対しては眉を擡めてみせる、とい

うのが無垢を銜ったポーズではあるけれど……何はともあれ、貴方のお好きな様に考えてくれていいわ……もし貴方があたしを年齢通りに見ることが出来ないのであれば、あたしは今の質問を差し控えるけれど……あたしの方は、こうして貴方と二人だけで話していると、男同士のように思えてくるものがあつたくらいだしね……」

「そうか、そのことがそれほどまでに知りたいんだね、分かったよ、お嬢さん、僕は恋をしたことがある」

「あら……で、人を好きになると、どんな風になるのかしら？」

「君、一度読んだ小説を、ただ単純にもう一度読み返してみてご覧よ、あっちこっちの頁でそのことに就いて出ているから……」

「それよ！ まさしくそれこそ、あたしがとても関心を抱いていることなの、読む本、読む本、恋愛のことで満ち溢れているでしょ、それしか書かれていないと言つてもいいくらいだよ！ ところが、実際の生活の中では、恋愛にとんとお目に掛かれないんだもの……少なくともあたしはね、お目に掛からないの、反対に、恋愛なしで平気な、寧ろそのほうが調子の良い人ばかりで……あたし、恋愛つて、本の為だけに作られた物じゃないかしらつて、単なる作者の空想の産物なのじゃないかしらつて自問自答した日々もあつた位よ、本当に」

ドノワゼルは笑い出した。「言つてごらん、ルネ、こうして僕らは君が言う通り同性同士の様に、腹を割つて、幼馴染みのよしみで率直に話をしている以上は、君が恋愛、とまでは行かないものの、誰かに対して或る種の感情を抱いたことが有るかどうか、訊いてみても良いかな？ 今度は僕の番だ」

「いいえ、一度も無いわ」一瞬考えた後、ルネが答えた。「でもあたしは、そう云う感情を抱き易いタイプではないわ。ああ云うことは、特に心に思うことが無い人、閑な人に起こるので、それでいっばいに満たされてしまつて固定観念になり、他の思いを寄せ付けなくしてしまう様な或る種の愛情、例えば父親に対する愛情の様なものに捉えられて、決して逃れることが出来なくなつた人たちには起こらないんじゃないかと思うのだけれど

……」

ドノワゼルは返事をしなかった。

「そんな愛情が邪魔をするというあたしの考えに、貴方は納得出来ないのね」ルネは彼に畳み掛けた。「それなら、よく分らせてあげるわ、思い出そうとすると、なかなか思い出せないんだけど……ああ！ 意識の筋道を完璧に、そしてとても率直に辿ることが出来る、本当よ……お話しするわね……子供の頃、あたし自身には何にもない……本当に、全く何もないのだけれど……でも、あたしと同じ位の年の幼友達が何人かいて、あの子たちは、人が見ていないとき、あたしたちと遊んでいた少年たちの鳥打帽の頂に接吻したり、好きな少年が食事したお皿の上から彼が吐き出したのを思い出すわ。ほら、ノエミ、ブルジョさん所のお嬢さんね、彼女は、そういうことを見たり聞いたりのを思い出すわ。ほら、ノエミ、ブルジョさん所のお嬢さんね、彼女は、そういうことに関してはとても積極的だったのだけれど……でも、あたしはと言えば、本当に無邪気に遊んでいたわ」

「その後……幼年期を過ぎて、今度はどうなったのかな？」

「時が経つても、あたしは何時でも、その手のことについては子供だった……ないわ、まったく、印象に残ってないわ、思い出せない……つまり……いや、馬鹿正直にお話することにするわ……一寸した、ほんの一寸した、貴方がお話ししていることの芽生えは、後年、小説の中で認識することになるあの感情の片鱗は、あるにはあったの……で、それが誰に対してだか分るかしら？」

「いいや」

「貴方に対してよ。ああ！ でもそれは一瞬だった……そして直ぐ、違った方法で貴方を愛したの……より良い方法で……敬意と感謝の念をこめて。あたしが貴方を愛したのは、甘やかされて育った子供だったあたしの欠点を直してくれたし、機知をあたしに教えてくれたし、美しいもの、高貴なもの、寛容なものが理解出来るくら



いにまであたしを高めてくれたし、またそんな時には何時も冗談を忘れず、その冗談で、あらゆる醜いもの、惨めで、無味乾燥で、下賤で、卑怯なものを揶揄していたから！ 貴方はあたしに鞠で遊ぶことを教えてくれたし、くだらないことには興味を持たない様にしてくれた。あたしの考えや、あたしの存在の多くは、そしてまたあたしが持っているほんの一寸の価値は貴方に負っているから、篤い堅固な友情を以て、飽く迄も友達に対するものとしてだけでも、あたしが父に抱いている様なある種の愛情を心から貴方に注ぐことで恩返しをしたかった……」この最後の方の言葉になると、ルネの声は高ぶった調子と深刻な語気を伴っていた。

「何だ、これは？」モープラン氏は入って来るなり、ドノワゼルのクロッキーに目を遣りながら、「これが、私の娘か！ それにしても、こりゃ、酷い中傷だ……」と言った。それからモープラン氏は画集ごと取り上げると、その上の画用紙を引き裂き始めた。

「えー！ パパ」とルネが叫んだ。「あたし、それ、取って置き度かったのに……記念に！」

## 十二

一頭立ての馬車が、モープラン家の人々を乗せて、軽やかにサノワの路上を走って行く。今は隣で煙草を吹かしている兄から譲り受けて、ルネは手綱と鞭とを手にしていた。

旅行に出たこと、外気に触れていること、乗り物に揺られていることよって陽気になったモープラン氏は路上で見掛ける風物に就いて冗談を言ったり、馬車越しに擦れ違う通行人に明るく挨拶したりした。他方モープラン夫人はと言えば、黙した儘、何事かを熟考している様子である。頭の中で彼女は、城館に迎えられた際の愛想の良い態度を準備し、磨きを掛けようとしているのだった。

「どうしたの、ママン」とルネが言った。「何も言わないのね……具合でも悪いの？」

「そんな事ないわよ、良好よ……良好」とモーブラン夫人は答えたが、「でもね、打ち明けてしまいわ、この訪問、一寸私には気が重いよ……それにアンリがいない時には……あのブルジョ夫人て人、何だか妙に冷たくなるんだわ……あの家、敷居が高いわ……ああ！ どうしようかしら！ 別にどうって事ないわ……あの人たちの財産なんか！ あの人たちが何処であれを手に入れたのか、わたし、良く知っているもの、あれは、或る貧しい職人からただ同然の、二束三文で買上げた或る一つの技術を元手にして稼いだお金よ……」

「ねえ、お前」モーブラン氏が声を掛けた。「一つじゃなくて、幾つもの技術を買収している筈だよ……」

「まあ、とにかく、あの人たちの家では、わたし、何だか居心地が悪いのよ」

「君は本当に人が好いのだね、あんな人たちのことでも思い悩むなんて……」

「でも、あの人たちの尊大な態度に、ちえつ、て舌打ちしている人、多いのよ！」モーブラン嬢はそう言うや鞭で一打ちし、馬が疾走を始めたその響きで馬車の中での会話も掻き消された。

モーブラン夫人の不機嫌には彼女なりの理由があった。彼女の困惑は正当化され得るものであった。彼女が向っている家の中にある全ての物が、訪れる者を恐縮させ、卑下させ、圧迫し、動揺させ、劣等感でいっぱいにするよう作用していたからである。如何にも金銭があるらしいと思わせるように様々な物が配され、巧妙に財産の豊かさが演出されていたのだ。裕福さは、そこでは他人に屈辱を味わわせる狙いがあったので、あらゆる方法を用いて人を怖気付かせていたが、豪華な家具調度品は非常に目立つ、もしくは洗練された形態をしており、天井は高く、召使いたちは相応しからぬほど尊大な顔付きで、控えの間には銀鎖を身に着けた守衛が突っ立ち、食事の際には金製平食器で料理が各人に供され、テーブルマナーは一連の王族風の習慣が用いられていたので、

ドイツの小宮廷の様に、二人差し向かいのときですら、母も娘もローブ・デコルテを身に着けていた程であった。家の主たちは、家屋の品格に合わせて振る舞い、またそう云う物腰を保つ様努めていた。その内装や生き方、暮らしぶりは、彼らの内なる精神の反映の様であった。男性は、立居振舞やお洒落、縮らした頬髭、上っ面だけの上品さなどの全てを英国のジェントリーから借用していた。女性の方は、尊大な語り口、極度に優雅さを追求した化粧や服装、大ブルジョワ特有の全てに對する無愛想さを以て、見事なまでに億万長者の傲岸不遜を体現して見せていた。彼らの慇懃無礼振りやお高く留まった愛想の良さからは、何人に対しても遜る必要はないと考えている彼らの内面が透けて見えるかの様であった。彼らの趣味からさえ、或る種の横柄さは感じ取られた。ブルジョ氏は絵画も、美術品も持たなかったが、彼の蒐集品は宝石であり、その中から彼は、二万五千フランの、欧州一美しいとされるルビーを見せびらかしていたものである。

社交人士はこれら全ての金品の誇示を凌ぐ勢いで集まり、ブルジョ家のサロンは流行となり、また高く掲げられた野党色で際立ち、パリでも屈指のサロンのうちの一つに数えられるようになっていた。ブルジョ夫人が健康状態を口実にして二、三回、冬をニースで過ごした後、このサロンは急速に人で溢れる様になったのだが、それは、休暇中に彼女が自分の家をイタリアに向う全ての地位の高い者、金持ち、著名人、時の人らに足溜まりとして開放したからであった。大きなコンサートを開けば、彼女の持ち前の美声と音楽家としての大才が賞賛され、ヨーロッパ中から集まった榮譽に包まれた人々が、パリで評判の人たちと邂逅したので、科学者たちや、最先端の哲学者たち、また研ぎ澄まされた美学者たちは、そこで政治関係者たちと肘を突き合わせるようになった。政治関係者らの中では、よく結束したオルレアン王党員の幹部の他は、一年前からアンリ・モープランが大変熱心にその陣営の中で頭角を現している、紐帯の緩い自由主義者の一団が代表格であった。それに加えて二三人の、ブルジョ氏が妻のサロンに連れて来た正統王朝主義者が目に付いたのであったが、それは、彼が正統王朝主義者

だったからである。

王政復古期に於いて、彼は炭焼き黨員であった。羅紗商人の息子であった彼は、その出自やブルジョと云う苗字によって、物心付いた頃には、貴族や城主、ブルボン家に対して強い反感を抱く人物になっていた。彼は陰謀に加担する様になった。彼とモーブラン氏はお互いにフリーメーソンと認知しつつ炭焼き党の集会で知り合いになった。彼の姿は、ありとあらゆる動乱の場面に見出された。当時彼は、ベルヴィルやサン・ジュスト、デュパン・エネを引用しつつ人々に訴えかけた。千八百三十年以降はやや勢いが鎮火し、彼は、共和制を奪った王政に眉を顰めて暮らすに留まった。彼はナシオナル紙を購読し、庶民の生活を憐れみ、議會を軽蔑し、ギゾー氏の政策に反対して逆上したり、プリチャード事件に就いては、憤慨し怒声を発したりなどしていた。

突然、千八百四十八年の出来事が起こり、地主である彼は、戦慄の中に目覚め、王政復古期の炭焼き黨員、ルイ・フィリップ治世下の自由主義者にすぐさま戻って立ち上がった。年金が下落し、家屋が無価値なものとなり、社会主義が台頭し、税制の改革案が出され、公債が紙切れになるかもしれない脅威に晒され、六月事件があり、革命中の、文無しにされるのではないかと云う恐怖に陥れるあらゆることどもが、ブルジョ氏を動揺させると同時にその眼を開かせたのであった。彼の考えは一気に変化し、彼の政治的な良心は息を吹き返した。彼は秩序を重んじる教義の方へと直進し、これまでの信念を曲げて、憲兵隊に助けを求める如くに教会に帰依し、また権威の絶対化と、権威の価値の神意による保証を求めるかのように神権を擁護した。

不幸にして、このブルジョ氏の突然にして率直な転向の最中であって、彼の受けた教育や青春、彼の過去、これまででの全ての人生は動揺し、もがき、抵抗したのだった。ブルボン家を支持してみても、彼はイエス・キリストの信仰への回帰はなしえなかった。彼は、攻撃、逃走、惰性の繰り返しのうちに、我を忘れて年をとった。何処で会おうとも、彼に接する者は彼が相も変わらぬヴォルテール主義者であるのを感じ取った。何時もベラン

ジェは、彼の中では、ド・メーストルに優越しているのだった。

「お兄様に手綱を渡しなさい、ルネ」とモープラン夫人が言った。「貴女が馬車を運転している姿を人に見られたくないから」

一行は、大きく壮麗な柵の前まで来たが、その柵の前には暮れ方になると瓦斯で火を点し、夜中じゅうそこを明るくする枝付き大燭台風の照明が二つあった。馬車は並木道の赤褐色の砂の上に向かい、シヤクナゲの大きな茂みに沿って進み、建物正面の石段にまで到着した。二人の召使いが控えの間の硝子張りの戸を開けたが、その床は大理石の板石張りで、背の高い窓の前には異国趣味の小灌木が並べられ、その緑で外界は遮られていた。そこからモープラン家の人々は、深紅色の絹の壁布が張り巡らされた客間へと招じ入れられたが、壁には、舞踏会の服装をしたブルジョ夫人の肖像画が一枚掛かっているのみであり、その絵には、アングルと署名されていた。開け放たれた窓越しに、池の傍の一只の鶴が見えたが、それはブルジョ氏が、彼の家紋に鶴の姿が描かれているという理由で、庭園にいることを唯一許した禽獣であった。

モープラン家の人々が大広間に這入ったとき、ブルジョ夫人は長椅子に腰掛けて、娘の家庭教師に朗読をさせてそれを聴いている所であった。ブルジョ氏は暖炉に肘を付いて、自分の懐中時計の鎖を弄んでいた。ブルジョ嬢は、朗読者の傍でつづれ織りの刺繍台で手芸に勤しんでいた。

ブルジョ夫人は、一寸どぎつい青色の大きな目をしていて、眉は弓形をしており、くつきりとした二重瞼で、通った鼻筋は誇り高さを強調するよう、顔の下の方を驕った感じに前に突き出した様子は、有無を言わずな優雅さを兼ね備えており、アグリッピーヌを演じていた若い頃の女優ジョルジュを想起させる。ブルジョ嬢は、とても目立つ褐色の眉をしている。長く、振り返った睫毛越しに、強烈で深みのある青色の夢見る様な瞳が覗く。彼

女が日の光の下に出ると、唇の両端の上の辺りに極めて短い産毛が白く光った。朗読者の女性はと云えば、何処にでもありそうな控えめの顔をしていて、内面も外見も人生に揉まれ、くたびれたタイプの老女で、古銭に描かれた肖像を思い出させた。

「まあ、本当に嬉しいわ」そう言うとブルジョ夫人は立ち上がり、寄木張りの床の、部屋の中央を示す縞のあたりまで来た。「これは、これは、親愛なる御隣人さま……驚きましたわ、でも嬉しいですわ！……随分長らくお会いしなかつた様に思いますわ、奥様、でも御親切に私たちと馴染を重ねて、月曜の夜会にも通つて来てくださる息子さんは例外ね……」夫人はお辞儀したアンリに握手を求めた。「このまま貴女方が何うなつてしまつたのか、この可愛い娘さんと……そのお母様が何うなつてしまつたのか、知らずに終るのではないかしらと危惧いたしておりましたのよ」

「左様で御座いましたか、奥様」とモーブラン夫人はブルジョ夫人と距離を取る様に努めながら言った。「どうも御親切に……」

「あら！ お気軽になさつて、さ、こちらへどうぞ」とブルジョ夫人は言つて、彼女の隣に坐るように指示した。

「日時は決めましたのですけれど、何度か延期いたしましたして、皆で揃つてご訪問致し度かつたものですから」「あらそう、とても待ち遠しかったですわ」とブルジョ夫人が言葉を継いだ。「私たちの家はそれほど離れてはいないので……それに、あの二人の子供をこの儘にしておくのは酷なことですわ」彼女は、二人一緒に成長したルネとノエミを指して言っているのであった。「あの子たちが会えないなんて！……おやまあ、まだ二人とも、抱擁の挨拶もしていないの？」

突つ立つた儘でいたノエミが、冷ややかに頬をルネの方に差し出すと、ルネは恰も子供が果物に齧り付く様な

調子でその頬に接吻した。

「ねえ、奥様」二人の娘の様子を眺めながらブルジョア夫人はモーブラン夫人に向って言った。「随分昔の事になりますことね、シヨセーダンタン街の塾にあの子達を連れて行きましたのは。あそこの講義、あの子たちも言っていましたけれど、私たちにも退屈だったわ！ そんなあの子たちをこうしてまた見ることが出来て……あの二人、楽しそうね……貴女の娘さんは明朗快活と云うか……お転婆さんね！ で、私の娘はと云えば……ああ！ 元気が良いかと思えば、沈んでいた……でも貴女の娘さんが私の娘を引っ張ってくださるから……そうだ、ほら！ 一時期、あの子達がジエスチャー・ゲームに熱中したことがあったでしょ、貴女、覚えているかしら？ あの時、あの子たち、変装する為に家中のタオルを持ち出して……」

「ああ！ そうでしたわね、奥さま」とルネが笑いながら言い、ノエミの方へ振り返って、「あたしたちがやった中では、熱過ぎる風呂に入つてブーブー言うマラーを演じて、マラブー（イスラム教の聖者）を当てさせた時のものが傑作だったわ。あなた、覚えているでしょ？」

「そうだったわね！ よく覚えてるわ」とノエミは微笑を漏らしながら言う。「でもあれは、あなたが考え付いたのよ」

「それでなんですがね、奥様、わたくし、或る事をお願いに上つたのですけれど、前以て、心構えが十分にお出来の様で、感激致しておりますわ、実は今日の訪問には目的が御座います。どう云う事かと申しますと、わたくしたちの二人の娘を結束させる為に参つたので御座います。ルネが喜劇を演じたいと申しております……自然、彼女は古い友人に白羽の矢を立てたので御座います。その様な訳で、もし貴女の娘さんがわたくしの娘の隣で演じることを許可して下さいるならば……仲間内の者だけが集まるささやかな家族の催しになると思つて……」

モーブラン夫人がこの様にお願いを始めるや否や、ルネと喋りながら、彼女に両手を取られるに任せていたノ

エミは、その手をすつと引つ込めた。

「ご提案に感謝致しますわ、奥様」とブルジョ夫人は応えた。「また、貴女の可愛いルネさんにも感謝致しますわ。これほど私にびつたりなの、私を喜ばせる貴女からの申し出は御座いませんことよ。それは、ノエミにとつては、大変良い事だと思えますわ。この子は、可愛そうに、引つ込み思案ですから……私、心配致しております……そんなお芝居でもあれば、少しは、話をしたり、自分の殻から抜け出したりするのに慣れて来ると思いますが……彼女の内面にも良い薬になるでしょう……」

「でも、お母様、よくご存知でいらつしやるでしょう……私、とつても記憶力が悪いのよ……それから、どう演じたらよいか、全然分からないし……怖いわ……いや、演じたくない」

ブルジョ夫人は娘を冷ややかな視線で射た。

「だつてお母さま、もし練習では出来たとしても……本番で失敗するわ、きつと……」

「演じなさい……それが、私が貴女に望んでいる事よ」

ノエミは頭を垂れた。

当惑したモーブラン夫人は、体裁と慎みを保つ為、彼女の脇の裁縫台の端の方に開かれた儘になっていた雑誌に目を遣つた。

「あらー!」ブルジョ夫人は我に返つた。「その雑誌には沢山の学識の高い人々が寄稿しておりますわね……それは、貴女の息子さんの最新の記事でしょ。で、お芝居は、何時お遣りになりたいお考えですか?」

「でも、奥様、すみません、問題の種を蒔いてしまいましたわ……貴女のお嬢様を苦しめる結果になつてしまつて……」

「あら! そんな事も仰らないでくださいな……私の娘は何時も決断を下さなくてはならないとき、この様



に怖がるのです」

「然しだなあ」と、モーブラン氏やアンリと話していたブルジョ氏は部屋の反対側の端から声を掛けた。「もしノエミが、本当に嫌がっているのなら……」

「反対よ、あの子は貴女に心から感謝するに違いないわ」とブルジョ夫人は、夫には応えず、モーブラン夫人に言った。「何時も、あの子を喜ばせる為には、こちらから一押ししてあげなくては駄目なのよ。それで、何時になるのかしら、公演は？」

「ルネ、何時が良いと思う？」とモーブラン夫人が訊ねた。

「うん、あたしの感じでは……あたしたち、稽古に一ヶ月は必要よ、週二回のペースで……ノエミの空いている日時を教えて貰わなきゃ……」そう言つてルネはノエミのほうを向いたが、彼女は黙っていた。

「分りかしたわ」とブルジョ夫人が言った。「それなら、もしお宜しければ月曜日と金曜日の二時、宜しいでしょ、ゴゴワ嬢」と言いつつブルジョ夫人は家庭教師の方を向いた。「娘を連れて行ってくださいね。貴方、聞こえているんでしょ、ラ・ブリシュに行く時の為に、馬と馬車と召使いの手筈を整えておいてください。私にはテロールとジャンを残しておくだけで十分だから。これでよしと……さて、ご夕食は、取って行かれますかしら？」

「あら！ 大変残念で御座います……都合が付きませんでして……今日は沢山のお客さんをお迎えしなくてはならないのですわ」

「その方々が恨めしいわ……ところで、主人の新しい温室、ご存知じゃない筈よね。私、花束差し上げてよ、ルネ……一輪お見せしたい花があるの……その花は二つしかなくて……もう一方はフェリエールにある……やはり一輪だけ……でも、そっちは全くの失敗作よ……こちらからいらして」

「我々はあちらへ参りますかな？」とブルジョ氏はガラス板越しに見えている玉突き場を示しながら言った。

「アンリさん、貴方はあの女性たちの為に置いていきますよ……さて、ここで一服と行きますかな」ブルジョ氏はエルサルバドルの葉巻カバナをモーブラン氏に渡しながら言った。「我々は、キャロム競技を楽しみましょう、どうです？」

「宜しいですな、キャロム競技とは」とモーブラン氏が返した。

ブルジョ氏は玉突き台のポケットを閉めた。

「二十四点で試合終了と行きますかな？」

「二十四点で行きましょう」

「お宅は、玉突き台はお持ちじゃないのですか？ モーブランさん」

「ええ、残念ながら、持っていません……息子がやらないものですから……」

「白球をお探しですか？」

「有難う……それから妻がですねえ、これを若者に相応しくない遊びだと思っているのですよ……」

「貴方からどうぞ」

「おっと！ 随分腕がなまってるなあ……尤も始まりは何時も勝負下手ですが……」

「然し貴方に対すると、私はまったく自由に動けなくなる……ほら！ 私のタップは酔っています……このキューとは相性が良かったんですがね」続けて、ブルジョ氏は威勢よく悪態をつき始めた。「あのならず者の労働者ども！ 一かけらの良心もありやしない！ 善良さんなんて、もう何も期待出来そうにありませんよ……おっと！ 貴方は好調ですな、三点ですね、得点を記入しますよ……あいつらの命令が幅を利かす様になっておりましてな……何時かなんか、昼間のうちにシャンデリアを設えさせようとしたんですが……それがですねえ、モー

プランさん、一人も見当たらないですよ……祭りだつて言うんですがね、何の祭だか、忘れちゃくれども……彼らは来ようとしませんですよ……今日じゃ、彼らは大領主の様に振る舞っておりますよ……当地じゃ、彼らが、狩や漁で仕留めた獲物を私らに提供すると思いませんか？ 上等なものが手に入った時には、彼ら自身がそれを食べてしまうのですよ。パリの方がどんな状態か、知らない私じゃありませんがね……四点！ それでですね！ 聞いてください……彼らが稼いだ金はすべてカフェに流れる……日曜日には、彼らは各々二十フランを浪費する……当地の錠前師なんか、ルフォシユ製の猟銃を所有している！ 彼は猟場をひとつ借り切るのでですよ！ ……まあ、私はふたつ、借りますがね……それで現在、労働の見返りとして要求してくるものときたら！ 当地では、草刈で、彼らは私から百スー取るんですよ……私は、ブルゴーニュに葡萄畑を持っておりませんがね、彼らは三年間、私の為に耕させてくれと申し出てきた者たちでしたが、三年目にもなると、土地の所有者の様な顔をして振る舞う様になりましたね……こんなのが、我々の立ち向かっている世界ですよ！ でもまあ、幸運なことに、私はもう、かなりの高齢ですから、結末を見ることはないでしょうが、百年後には、人を任せさせる手段を見つけることは出来なくなるでしょう、つまり使用人という存在がいなくなってしまう筈です……このことを、私はしばしば妻や娘に言っているのですがね、見ていなさい、今に自分で寝台の準備をしなければならぬ様になるから！ とね……五点……六点……それにしても貴方、お上手ですなあ……我々は、大革命によつて滅ぼされたのですよ、お分かりでしょう」そう言うと、ブルジョア氏はある曲を低吟し始めた。

それ、ララー、ララー、ララー、

ララー、ララー……

「そんな事を考える様になるなんて、我々が出会った三十年ほど前には、貴方には、思いもよらなかったでしょうね、覚えていますか？」とモーブラン氏は軽く微笑して言った。

「その通りです……あの時代は最高に美しかった、美しすぎたのだ」ブルジョ氏は彼のキューの上に左手で寄り掛かりながら言った。「ああ！ 我々は若かった……よく記憶しているつもりなんだが……あれは、ラルマンを護送している時だったが、そうさ！ あの一発は、俺の人生で最高のパンチだ、起死回生の一発だ！ 大通りを横断する為に俺が地面に投げつけた襷掛けの警察官の靴の鉄を、今も眼前に彷彿とするね！ ポワソニエール街の角で、警察のパトロールにばったり出くわしたんだが……始めはかなり苦戦したが……俺はカミナードと一緒に……カミナードの事はよくご存知でしたよね？ いい奴だったな……あいつはプチ・ペール教会の伝道部へ、千五百フランもする海泡石のパイプを手に、パレ・ロワイヤルの売笑婦まで一緒に連れて喫煙しに出掛けて行くような男だったが……やつは運良く脱げうせて、俺は銃尾で小突かれながら派出所に連行されたが……幸いにも、デュロランが俺に気付いてくれたんで……」

「ああ！ デュロランか」モーブラン氏が口を挟んだ。「我々は炭焼き党では同じ集会場にいたんだ。あいつは一軒、シヨールの店を持っていたと思うが……」

「そうさ、で、あいつが最後はどうなったか、知ってるか？」

「いや、奴の行く末は見失ってしまった」

「それなら、お話ししよう、ある日のことだ、さっきのような出来事が全て済んでしまったあと、あいつの相棒が、奴から二十万フラン受け取ってベルギーへ逃げた。その男の後を追って警官が数人、派遣された……、この相棒の消息が途絶えた。わがデュロランはある教会に入ると、もし金が見つかるなら改宗しますと願をかけた。彼はお金を見出し、今じゃ、ごりごりの信心家さ。俺も、もう会ってはいないがね……それにしてもあの時代は、

熱いものがあつたねえ、そうじゃないか。俺はあいつに、通り過がりに目配せで合図した……俺の家に二十五挺の銃と五百個の薬莖があつたからだ……警察が来たとき、奴はそそくさと逃げちまったが……結局俺は捕まつて、ラ・フォルス刑務所に送られるはめになった、「九号棟」だつたな、二三度、夜中に起こされて、尋問に向わされたりしが、道すがら、何となく、銃殺されるんじゃないかと思われて来たもんだ……あそこで過ごしたでしょ、貴方も、だから事情は分かるだろう……ああいった事どものすべてが、社会主義への道だつたなんて！ しかし、あの一言が、俺の目をしっかりと見開かせたのは確かだ……出所すると、監獄のなかで出来た友達が、スタンの俺の家を訪ねて来て、俺にこう言つたんだ。「なあ、町役場で聞いたんだが、お前のところの親父は土地持ちで、金持ちだつて話じゃねえか……それでいて、お前さん、俺たちと一緒にいた訳だろう？ 俺ははてつきりお前さんは一文無しかと思つていたよ……」ほら、お分かりでしょ、モープランさん、どうなっているのか分らなくなつてきたと思つていたところへこの一言ですよ！……あの当時、自分は、私と一緒に歩いている者皆が、単純に私が望んでいるのと同じ事を欲しているのだと確信していたのですからね、法の前での平等、特権の廃止、反貴族の八十九年の大革命の完成……私が望んでいたこれらの事が達成されれば、全ては終ると信じていたんですよ、私は……十一……貴方の一つ前の点を私は記入しましたかねえ？ しなかつたと思ひますから、じゃあ十二点としときましよう……ああ、畜生！ 我々が欲していた共和制、その実態を見たときの心境と言つたら、たまらなかつたですな。二月に、パリケードから降りてきた二人の男が、「五万リーブルの年金を貰わなきゃ、此処を去るつもりはなかつたんだが……」と言うのを聞いたときの気持ちも同じですよ。それから、労働法、続いて累進課税、不公平、共産主義の偽善！ ですが、累進課税によつてですね「ブルジョ氏はそこで一息ついてから、雄弁に続けた。「共産主義者の中に、これで一山築いてやろうと考えている奴がいない訳がない……十三点、十四点、十五点、結構ですな！ ああ！ 貴方は強過ぎる……まあ、これらすべての事によつてですね、私は

転向を促されたのでして、お分かりでしょう？」

「よく分かります」とモーブラン氏が答えた。

「私の球はどちらへ行きましたかな？　そこですか？……完全に転向しましたよ……積極的に正統王朝主義者になりました。また突き損なった！……ただ……」

「ただ？」

「ただ一つ問題があつて……ああ！　その点に就いては、いやはや、私の意見は何時も変わらないのですが……それを貴方にお話しします……私の問題は、主任司祭に纏わるあれこれの事なんです……十八点！　やれやれ、私は打ち負かされたな……この家にも当地の主任司祭を招くのですがね、なにせいい奴だもんですから、でも一般に司祭というものは……夜中に神学校の塀から飛び降りて腿を怪我した私のような者が一人でも司祭と知り合いになつてみると！　偽善者だらけなんですよ、お分かりですか、モーブランさん！

黒き男たちよ、何処より来るや？

我々は地獄より来たりし者なり

ああ！　これですよ、私のお付き合いしている相手は！　「善き者たちの神！」とか何とか言つて！　そして「ユダ」。

わが友人たちよ、もつと声を低めよ

ユダがいるから、ユダがいるから

二十一点……貴方はあと残り三点だけですよ……ほら、私が製鉄所を持っている地域に、ひとり司教がいるでしょう、これがまた随分とお人よしでしてね……そんなわけで、えせ信心家らはみな彼が大嫌いです……ああ！ 彼が、もし狂信家や偽善者を生み出すような男で、ミサに行つて……」

「わたくし、ブルジョ夫人のあんなに機嫌の良い顔見たの、初めてだわ」と、馬車に再び乗り込んだとき、モーブラン夫人は言った。

「変な男だなあ、あのブルジョつて奴は！」とモーブラン氏が漏らした。「玉突き台を持っているとはご苦労なこつた……十二点のハンデを付けてやればよかつたかな……」

「あたし」とルネが喋り出す。「ノエミつて、とても妙な人だと思つたわ……見たでしょ、アンリ、あの子がどれほどお芝居をするのを嫌がつていたか」

アンリは返事をしなかつた。

### 十三

ノエミはモーブラン家の客間に、家庭教師を従えて入ってきたが、やや当惑したような心配しているような、殆ど恥ずかしがつているらしい様子であつた。敷居のところであつた止まって部屋をぐるりと見渡し、それからほつとしたような、漸く緊張がほぐれた様な表情になり、おでこを突き出してモーブラン夫人に接吻させ、ルネとは両の頬を互にくつつけて抱擁の挨拶を交した。ルネはおどけた様なにこやかさで、戯れと愛撫の入り混じつた手付きをもつてノエミの肩から短外套を脱がせ、リボンをほどき、帽子を取つた。

「ところで」とルネは、その小さな拳を中に入れ、幾つかのピンクの百合で飾られた白いブロードレースののしやれた帽子をくるくるっと回しながら言った。「こちらドノワゼルさんです……以前どこかでもう会っていると思うけれど……けっこう昔にだとは思うけど……で、彼をあたしたちのお芝居の監督として、発声の抑揚の教師として、プロンプターとして、そして照明係として、これらすべての担当者として！ あなたに紹介いたします」

「幼少の頃、この方がたいへん親切にしてくださいましたこと、わたし、忘れもしませんわ」

そう言うところノエミは、少女時代の思い出に心乱れて赤くなり、可愛らしい不器用な手つきでドノワゼルにおずおずと握手を求めたが、その指先は小刻みに震えていた。

「ああ！ でも、なんて素敵なお服装なのでしょう！」ルネはノエミの周りを回ってみながら語を継いだ。「非の打ち所が無いくらい綺麗よ！」タフタ織りのドレスの絹の折り目の上を何度か軽く手で触れたり、そのスカートを指で摘みつつ床の近くまで腰を折りながら点検してみたりしたあと、「かなり美しいマチルド役が出来上がりそうね……あたし、妬いてしまいそうよ、分かるでしょ？ この気持ち」そう言うところ再び立ち上がって「ねえ、見てよ、ママン、この間も言ったけれど……彼女には敵わないわ……」ルネはノエミの横に立ち、手をかざしてその背丈を測ってみせた。「あら、あなた、あたしよりも大きいわ……」ルネはノエミをはなさず鏡の前へ連れて行き、擦り寄って、互いの肩の高さを比べてみて「ほらね！」と言った。

家庭教師は客間の隅のほうへ行つて、静かにしていた。彼女はしとやかに本を半開きにして、そこに刷られた絵を眺めていた。

「ね、あなたたち、もう台本を読み始めたかどうかしら？」とモーブラン夫人が提言した。「アンリを待つ必要はないわ……女優たちの準備がすっかり済んだ、最後の方の稽古にしか出て来ない筈だから」



「待つて！ 今すぐに始めるから、ママ、あと少しだけお喋りさせて……こつちへ来て、ノエミ……そこ。あたしたちの間には、沢山のささやかな秘密があるのよ……出逢つて以来の、語り尽くせないほどの話題が！ 数世紀分、て感じよ……」

そう言うと、ルネはノエミと泉の音を思わせる、囁りのような雑談を始めた。若々しく澄み切った声で交されるお喋りは何時終るとも知れず、笑いが弾けたかと思うと、静かになってひそひそ話になる。ノエミは、始めは守りの姿勢だったが、すぐ、よくある心情を吐露する際の穏やかな態度になり、話すうちに昔のあれやこれやを思い出して話題にした。一時期、会わなかつたせいもあり、お互いに、どんな事があったか、それぞれがどんな風に成長したかなどを訊ねあつた。三十分くらい過ぎたころの会話からすると、娘たちの心は、二人一緒に幼心を見出した様子であつた。

「あたしは絵を描いているわ」とルネが切り出した。「ねえ、あなたは？ あなた、綺麗な声をしていたじゃない……」

「えー！ その話はしないで」とノエミ。「わたしは、歌わされていたのよ……ママがね、わたしに大きな夜会で歌つて欲しがるのよ……あなたには分らないかもしれないけれども……わたし、沢山の人に見られている所に出ると……震えがこみ上げてきて……ああ！ 怖いわ……始めの頃は、涙が溢れてきたくらいよ……」

「ところで、ねえ、これ、食べない……あたし、この青りんご、あなたのために取つておいてあげたのよ！ 相変わらず、青りんごは好き？ そうだといいいけれど」

「結構よ、ありがとう、ありがとう、ルネちゃん、おなか、空いていないの……本当に」

「あらあら、ドノワゼル、窓から何かとても面白いものでも見えるのかしら？」

ドノワゼルはブルジョ家の召使いが庭にいるのを見ていた。すると召使いはバチストの薄いハンカチでベンチ

のほこりを払って、そのハンカチを緑色の横木の上に広げ、その上に注意深く赤いフラシ天のキュロットの尻を乗せ、片方の足をもう一方の足の上に交差し、ポケットから葉巻をひとつ取り出すと、それに火をつけた。そうしてドノワゼルが見ているにもかかわらず無頓着に堂々と、彼の周囲のさして広くない敷地に対して、庭園付きの城館に仕えている男としての軽蔑の視線を投げ掛けていた。

「ぼくは、いや、何も見ていやしないさ……」ドノワゼルは窓辺を去りながら「二人の邪魔にならないようにと思って遠慮していたのさ」と言った。

「あら！ あたしたちもう十分に色々なお話をしたわ！……だからこっちへ来て、あたしたちとお話ししましょうよ」

「いま何時かな？ ルネ。今日から練習を始めるんだったら、もうやらなきゃ……」

「ああ！ ママン、ねえ、今日はとても暑いわ……それに気になる日付の金曜日だし……」

「とすると、仕事始めが十三日の金曜日」真面目な口調でドノワゼルが言った。

「やめて！」ノエミが信仰に満ちた目を彼に向けた。

「聞く必要ないわ、彼は人をその気にさせるから。四六時中、こんな悪ふざけを言っているのよ、ドノワゼルったら……いいでしょ、練習は次回からにしましょうよ」

「お任せするわ」ノエミが返した。

「それでは、楽しみましょう……ドノワゼル、面白いこととしてよ、いますぐに……で、もし、すごく笑わせてくれたら、とつても可笑しかったら、絵を一枚あげるわ……あたしが描いた……」

「またかい？」

「まあ！ 親切な御返事なこと……がっかりだわ……」

「お嬢さま」ドノワゼルはノエミに近付いた。「私の立場をご理解ください……私はすでにこちらのお嬢さまからは茄子と何か安っぽい置き物を描いた絵を頂いておりますし……その対として、また一切れの西洋南瓜とブリのチーズのひとかけらの組み合わせの絵も頂いております……心からの贈りものとは知りながら……私は部屋のなかでさしずめ八百屋か何かになったよう……」

「男なんてこんなものよ、分ったでしょ！」陽気にルネがノエミに言った。「みんな付き合い甲斐がないわ、そう思うでしょ！ そんな男たちと何時か結婚するんだと思ったら、たまらないわ！ ところで、あたしたちって、もういい年よねえ？……二十歳だもの！ 驚きよ、何はともあれ、もう二十年が過ぎてしまったのよ！ 自分が十八になるなんて夢にも思わないじゃない？ それで十八になったらそれでそれまでの若さを失ってしまう！……結局は何が残るのかしら！……そうだ！ ねえ、この次のときには、ちよつと楽譜を持ってきてくれない……連弾しましょうよ、あたし、出来るかどうか、分からないけれど……」

「で、練習を始めるのは何時？」ドノワゼルが訊ねた。

「ノルマンディー風に！（返事を曖昧にしてごまかす際の表現）」数年来、アトリエや劇場から起こって、やがて社交人たちの口の端にのぼるようになった冗談口をたたいてルネが答えた。

ノエミは聞いた言葉の意味が分からないらしくどぎまぎした様子だった。

「じゃあ！ そうね」ルネはノエミに向つて「ノルマンディーのカン！ あら！ 尻取り、知らない？ あたしは一時これに凝つたものよ……あたしの話、ひどく退屈みたいね、ドノワゼル、そうでしょ？ ねえノエミ、社交界にはよく出入りしているの？ この冬は何処にいたのか教えて……あなたが出た舞踏会についてお話ししてよ……」

するとノエミは答え出し、胸の内を語って、少しずつ生き生きしてきた。微笑が顔に漂い、優雅さのうちにも

寛ぎが感じられるようになった。陽気で幸福な、若さ溢れるこの客間でルネに対しては、自由な空気や闊達な息吹といった様なものに触れて、ノエミは晴れ晴れとしてくるらしかった。

四時になっていた。家庭教師が、バネのように立ち上がって言った。「お嬢さま、お時間です。サノワで大切な夜会があるのはご存知ですね……着替えのお時間もお考えになられて……」

十四

「今度は、おふざけ抜きで行きましょう……真剣に演じていきますよ」ドノワゼルが言った。ノエミさん、そこに坐ってください。此処からでしたね、そうですね？　一……二……三……」

彼は手を打ってから「はい！」と掛け声をかけた。

「第一場ね」ノエミがためらいながら言った。「まだ自信がないの……第二場のほうがよく呑み込んでいるわ」「第二場のほうがいいんですか？　じゃあ第二場に移りましょう。アンリの役をぼくが担当しよう、《こんばんは、貴女》」

ルネが大きな声で笑い出したので、ドノワゼルは台詞を中断した。

「あら！　どうしましょ」ルネがノエミに向って話し出した。「変よ、その坐り方！　砂糖ばさみのなかに収まった角砂糖みたいよ！」

「わたしったら！」ノエミはひどく狼狽してとるべき姿勢を探した。

「俳優たちを困惑させるような真似はしないで欲しいなあ、ルネ」とドノワゼル。また演じ始めて「《こんばんは、貴女、お邪魔じゃありませんか？》」

「あ！ そうだ、お財布はどうしましょう？」とルネが思わず声を上げた。

「それは君の担当だと思っていたが」

「あたし？ 全然違うわ……反対よ、あなたでしょ。あなたが小道具の責任者じゃない、冗談じゃないわ！

……ね、ノエミ、あなたがもし結婚していたとしたら、財布の紐を夫に握らせようなんて思うかしら？ そうなれば夫は小売店の主人みたいになる、そうでしょ？……さっさと書斎に閉じ込めるに限るんじゃない？」

「稽古続ける？」とドノワゼル。

「ねえ、ドノワゼル、あなたのその質問、ぼくは煙草を吸いに行きたいっていう意思表示でしょ」

「煙草はいつも吸いたいさ、ルネ」とドノワゼル。「とりわけ、吸う必要がないときに吸いたくなる」

「でもそれって褒められた事じゃないわよね！」

「本当にその通りだと思う。だから止めないんだ」

「結局、煙草を吸って、あなた、何かいいこともあるの？」

「悪い習慣の喜びさ、それが継続する熱情の原因なんだ」そう言うことから、ド・シャヴィニー氏の登場の場面をふたたび演じ始めた。《こんばんは、貴女、お邪魔じゃありませんか？》

「《私が？ アンリ、愚問はやめて！》とノエミ。こうして稽古が始まった。

(つづく)